

## 2013年 ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア 活動報告書

日時 2013年 2月7日～10日  
場所 フィリピン共和国 首都 マニラ市近郊 スラム  
参加者

歯科医師……………18名  
薬剤師……………1名  
看護師……………1名  
歯科衛生士……………10名  
歯科技工士……………2名  
歯科助手……………2名  
高等学校教員……………3名  
一般参加者……………8名  
大学生……………5名  
高校生……………24名  
現地通訳……………14名  
  
総勢……………88名

### 2月7日 活動初日

#### 成田空港にて

AM 7:30

日本の玄関口 成田国際空港。旅行、ビザ初、様々な理由で今日も多くの人達で賑わっています。中には高校生の修学旅行の姿まで…

しかし、その中に年齢を問わず大きな荷物を抱えた数十名の団体があります。

それこそが 2013年 ハローアルソン・フィリピン医療ボランティアの参加者達です。

毎年参加をしてくれる懐かしい顔ぶれや、やや緊張した面持ちの初参加の人達、そして今年は24名の高校生たちが私達の活動に参加してくれました。

事務局の人達が慌ただしく搭乗手続きや各資料を配付しています。私の所に一人の高校生がやってきました。群馬県支部から来た 船山 改君です。彼は以前、事前研修の際私と電話で話したことがありました。その時私は「よし！ボランティアがんばれよ。先生とは空港で会うから一番初めに挨拶に来なさい！私もあなたを最初に探すから。」と男の約束を交わしました。

「おはようございます！！船山改です。」元気の良い高校生が目の前に現れました。すると腕にはなんとギブスをしています。スノーボードで怪我をしたそうで、「ご迷惑をかけてすみません」と私に言います。私は笑いながら「何を言っているのだ。今からボランティアに行く人間達があなたの怪我を迷惑と思うわけがない。ボランティアに行く人間に身体的、精神的制約があるのか。腕が不自由ならその分、みんなで支える。もうすでにあなたはみんなからボランティアを受けている。そのあなたが一番現地で頑張らなければならないのだよ。」「ハイ！」すがすがしいほど元気の良い返事が空港に響きます。

今年はどうな出会い、感動が待っているのでしょうか…

## マニラ到着 PM 13:30

むせかえるような暑さ。南国の独特とした臭い。そして乾ききった風と埃の混じったマニラの空気。今年もまたこの地に来ることができました。団員が一斉に上着を脱ぎ始めます。真冬の日本から来てきた服の下には、赤や黄色の色鮮やかな「ハロアルTシャツ」。

今年には虫歯菌をやっつける「戦隊ヒーロー」の絵柄です。空港の職員も一瞬「何の団体だろう」という顔つきですが「JAPAN & Philippines Joint Medical Aid」と胸書かれた文字を見てある職員が私の顔を見て「一年ぶりだね」と声を掛けます。「今年は74名です」と答えるととても嬉しそうに「グッド、ラック」と笑いました。

2台の大型バスが私達の到着を歓迎するかのように大きなエンジン音を轟かせています。A班・B班に団員が別れていきます。いよいよ今年最初の活動場所、カビテ市「ワカス小学校」に向かいます。

## 物資配布 PM 15:30

空港から約45分。首都マニラの喧噪から離れバスはマニラ湾の浜辺にひしめくように立ち並ぶスラムへと移動していきます。竹とトタンをつなぎ合わせた今にも崩れそうな家々を抜けここから先はバスが入ることはできないため、「トライシクル」というバイクタクシーを手配しました。これはフィリピンの人達が普段頻繁に利用する「足」で、大人2~3人ぐらいが窮屈ですが乗り込むことができます。

バスから会場まで約800メートル。団員が次々と乗り込みます。みんな初めて乗る「トライシクル」におはしゃぎです。勿論、この距離を歩くこともできますが、やはりここは一日100円で生活をするスラム内ですので、まずは安全面の問題。そして、この地域の住人の主な職業にこの「トライシクル」を生業としている方が多く、その支援を兼ねて昨年同様このような移動手段にしました。運転手たちもスラムの住人も私達の到着を心待ちにしていたようで、物資配布の会場でもある「ワカス小学校」ではもうすでに数百人が列をなしています。

## バランガイ ワカス2エリア

このエリアは約 3,000 人の人々が暮らしています。そのほとんどが海沿いのスラムという特性から漁師やトライシクルで生計をたてています。

また、この地区では約 1500 人の子供達があります。小学校は公立の為、無料で誰でも入学はできますが、貧困のため家計を助ける為に親の仕事を手伝い途中で通えなくなる子供もいれば、仮に卒業をしたとしても次の進路に進学ができないのが現状です。

教育を受けることができない者に将来的に安定した職に就くことはとても困難です。貧困が貧困を生み、いつしか子供達は夢を見ることを諦める…

私が村長とインタビューをしているとき、その周りを私の子供と同じくらいの子供達が無邪気に走り回っています。泥だらけで中には靴を履いていない子もいます。分かっているてもどうしようもできない思いが胸をつまらせます。

今回は小学校を会場とし、延べ 500 人の住人に歯ブラシ、タオル、固形石けん、お米2キロ等の物資支援を行いました。現地活動責任者の今西先生が住人達の誘導、配布、の導線を大きな声で指示をします。ここでは主に高校生が主役となって一人一人に直接皆さんからご協力頂いた物資を渡していきます。

初めはスラムの雰囲気や圧倒され緊張気味だった高校生もフィリピン人特有の陽気さと私達の訪問を心から歓迎してくれる温かな雰囲気に次第に緊張もほぐれ、皆笑顔で物資を渡しています。

会長の林先生から「今年もこの場所に来ることができて嬉しいです。沢山の日本の方が皆さんの為に協力をしてくださいました。皆さんもどうかお元気で毎日を過ごしてください。」

通訳がマイクを使い現地語に訳すと、会場からは割れんばかりの拍手と声援が飛びます。

いよいよ最初の住人が高校生等が待つ物資へ歩いてきます。その顔は嬉しさと少しの恥ずかしさで何とも言えない笑顔です。

「サマポ(ありがとう)」「サンキュー」と皆口々に感謝の言葉を言います。屋根のある会場とは言え、気温30度近い暑さの中、高校生達が一人、一人に物資を渡しています。

しかし、今回この会場で物資を貰える人数は 500 人です。ではこの 500 人はどのように選ばれるのでしょうか。それは私達が来る数週間前より地区の村長をはじめその地域のリーダー達が相談し合い、最も貧しい家庭「500 世帯」に事前に整理券を配っているのです。「私達にも限界があるがそれでは不平や不満がでるのでは」と尋ねると、

「その時は、また来年神様がきっとチャンスをくれるから」と言います。」と、村長は語りました。私はその村長の何とも言えない寂しげな表情に数秒言葉につまり「では、来年も必ずここに来ます。その時までもっと私達も頑張って多くの方々に支援できるようにします。」と話しました。

私は高校生達が笑顔で一生懸命活動をする姿を見ながら、どれほどこの住人がほんの数

食分のお米を喜び、数本の歯ブラシ、タオル、石けんが彼らにとって貴重かということを実感しました。

ここは飛行機でたった4時間の場所です。同じ地球に暮らし、同じように誰しもが幸せを願う、同じ人間です。

列が少しずつ短くなっていきます。最貧困層500人間限定の物資配布が今終わろうとしています。列の中に赤ちゃんを抱きながら、5歳くらいの子供と一緒に並ぶ母親がいます。私は「どこか見覚えが…」と思いながらその母親は嬉しそうに物資を受け取り、何度もお礼を言いながらスラムの住居へと消えていきました。恐らく昨年も物資を渡した女性なのでしょう。貧困が貧困を呼び、そしてその貧困からの脱出は大変困難な事を物語っています。

最後の物資が手渡されました。会場では大きな拍手と共に村長からのお礼の言葉が述べられています。今年最初の活動が今、終わろうとしています。「速やかにバスに戻って下さいー！！」現地活動責任者の今西先生の号令が飛びます。

私は忘れ物などのチェックをしながら最後会場を後にすると、先程お米を配っていたテーブルに数人の子供達が群がっていました。彼らは物資配布の際、こぼれてしまったお米を必死にかき集め、コンクリートに落ちたお米を一粒、一粒、拾い集めているのです。

賞味期限を過ぎれば無数のお米が破棄される日本と地面に落ちた米粒さえも拾い集めるフィリピンのスラム…

全てが有り余る社会で生きる私達が失ったもの。

今年も人生においてかけがえのない4日間が始まります…

## 器材準備 PM 21:00～

以前までの活動では使用する器材は主に各支部(各歯科医院)からの持ち出しがほとんどでした。しかしここ数年多くの先生方のご協力を得て、少しずつではありますが、器材や材料も充実してきました。そこでホテルのご厚意で毎年無料で一部の器材をホテルの倉庫の一角に保管してもらっています。初日の活動が終わり、いよいよ明日から始まる医療奉仕活動にむけて副団長の木本先生を中心に全ての器材をチェックします。電圧が不安定なここでは充電をするにしても特別な器材が必要となり、また、明日はA班、B班の2班に分かれそれぞれ別会場での活動となる為、物資、材料等も全て二つ分けていきます。

器材部屋に担当の歯科医師、歯科衛生士が遅くまで作業にあたります。別の部屋では「マニラミーティング」高校生達のミーティングが会長、現地活動責任者を中心に行われ、一般参加者の方々も見学に来ています。「ボランティア」という志に集まった74名が少しずつ一つになろうとしています。

いよいよ明日から今年の医療奉仕活動が始まります…。

## 2月8日 活動2日目 ～医療奉仕活動 初日～

AM 5:00

「年をとると早く起きる…」

一応、5:30 にモーニングコールは設定をしているものの、気持ちが高ぶっているのか、年齢のせいなのか、毎年の事ながら私には目覚まし時計は必要ないのかもしれませんが。カーテンを開けると見慣れたマニラの朝焼けと、早朝にも関わらず遠くから車のクラクションの音が一日の始まりを告げるかのように鳴り響いています。そしてこれも毎年の事ですが隣で熟睡している今西先生を起こし、ハロアルTシャツに着替えると、また更に気持ちが興奮するのを憶えます。

朝食会場には既に同じユニフォームを着た同志たちがこれから始まる活動の為にエネルギーを補給しています。ホテルロビーには器材搬入担当等が大きな荷物を手際よく運んでいます。

AM 7:15

全団員がホテル前で恒例の記念撮影です。撮影班が声高らかに合図をします。最前列にはこの会のシンボル「ハロアル団旗」が広げられています。みんなとってもいい顔です。適度の緊張と興奮が入り交じりながらA班・B班にそれぞれ分かれていきます。

今日は2会場に別れての医療奉仕活動です。各バスの前に地元ロータリークラブが用意してくれた「救急車」が先導役として待機しています。世界でも有数の渋滞国マニラ。信号や車線などはほとんどありません。その為、譲り合いながら譲らない朝の通勤ラッシュでは到底予定通りに目的地まで着くことはできません。

けたたましいサイレンが鳴り響きながら救急車の先導のもとバスが出発します。以前はパトカーの先導でしたが、スラムに行くに従って余りその効力がなく、反対にわざと道を空けないという事もあるそうです。反対に救急車であれば「命」に関わる問題と認識されているため効果は絶大です。しかしあのサイレンの音では「早朝から何事か」と多くの住民が窓から覗き込むのも無理はありません。

ホテルから約1時間。2班がそれぞれの会場に到着しました。

気温 29 度。今年も素晴らしい天気恵まれて、といいますが、恵まれすぎて既に活動開始から皆汗まみれです。私はA班を団長の私が担当させていただき、B班には会長、現地活動責任者、副団長の3人が活動を引っ張ってくれます。

## A班 カビテ市 ビナカヤン小学校

細い路地の周りはトタンや木材、石など、あらゆる物をつなぎ合わせピンクや赤などカラフルでフィリピンらしい外壁の建物が見えます。この地区は以前より物資配布のみの活動場所でしたが、昨年より学校、周辺住民の強い要望より歯科治療活動を行うようになりました。

バスを降りると既に生徒達が沢山待っていました。入り口から会場となる学校の中央に位置する屋根付きのバスケットコートのような所まで、子供達が左右に分かれ日本とフィリピンの国旗を振りながら歓声を挙げ歓迎してくれます。団員達は少し照れながらバスから器材を運び込み、診療の準備をします。

AM 9:00

私の携帯にB班の担当 今西先生から連絡が入ります。「こちらは準備完了。そっちはどう?」「こちらも順調。開始しますか。」「OK。健闘を祈る」

B班も準備が整った様です。いよいよ今年の医療奉仕活動が始まりました。

この学校では約 300 人の生徒達が治療を希望しています。まずは低学年からの治療を希望されました。全校生徒 2,000 人。5 歳からの幼稚園を併設しており、12 歳で卒業します。

公立の小学校なので入学は無料。しかし、貧困のため子供達は家計を助けるため親の仕事を手伝ったり、ゴミを拾いお金に換金できるものを集めたりと、全体の 2 割は途中で学校に来なくなってしまう。この学校には制服がありますが、これは自分達で用意しなければなりません。その為、貧しい地区の子供達は親戚や周りの人達にお願いをして何とか入学までに買い揃えるそうです。しかし、ノートや鉛筆は高価な為ほとんどの子供達は買うことができません。教科書などは数人で使用し、黒板はあるもののチョークなどはほとんど無く、紙にマジックで書いた単語や算数の問題を張り出しては何度も使い回しをして授業を行っていました。

外見は綺麗で大きな学校ですがその中身はやはりスラム地区の学校で、全くといって良いほど勉強をする道具がありませんでした。

屋根のある会場とはいっても、そこは南国フィリピン。肌を突き刺すような日差しとむせかえるような暑さは A 班のメンバーの体力を否応なしに奪っていきます。この会のムードメーカー シンギから大きな声で檄が飛びます。「みんな笑顔でがんばろう」。

炎天下の中、子供達の長蛇の列が見えます。その子供達の表情は治療をして欲しい半分、不安半分です。会場は屋外の為、友達が歯を抜かれているのも見えてしまうのでしょう。

自分の番が少しずつ近づくにつれその表情は険しくなります。そんな時、一般参加者で教員の星野先生や原島先生等が時には英語で、時には日本語で、子供達の不安を取り除くように楽しく話しかけています。

高校生達は必死に先生達の補助をしています。患者の誘導をしてくれる人、薬の処方を管理してくれる人、自家製の絵本で楽しく歯ブラシ練習を教える歯科衛生師、そして大粒の汗をかきながら黙々と治療をし続けてくれる歯科医師、みんなが今自分にできることを精一杯やっています。

すると、私の携帯に B 班の今西先生から連絡が来ました。「そっちはどう?」「こっちは室内でクーラーが効いていて快適!でもとても暗くて手元が見えない。」

一瞬言葉を疑うような返答でしたが、目の前に顔を真っ赤にしながら活動をしている A 班のメンバーにはとても伝えることができずに B 班の様子に耳を傾けました…

## B 班 マニラ市 P ブルコス小学校

ここはマニラ市内にある 10 エリアにある小学校です。周囲住人の数は不明で日本のような住民票などは全く意味を持たず、住みやすい所、わずかでも食べることにありつけそうな場所に人々は集まります。

この学校の生徒数は 4,615 名。その中でも今までの活動でも初めてとなる「スペシャル・チルドレン」と呼ばれる障害を持った子供達を受け入れている学校でした。

この学校では 6 歳からの子供は何の区別もなく全て受け入れており、今回は 278 名在籍する障害児の内、120 名をまずは優先して治療して欲しいと希望がありました。この学校は市からの支援が比較的されており、例えばノートや鉛筆類はバックに入れ各生徒に支給され、年に T シャツ 3 枚、靴なども支援されています。しかし、周囲の生活は決して恵まれてはおらず、この住人たちは主に「物売り」や「トライシクル」で生計を立て、一日平均 500~600 ペソ(日本円で 1000 円程)で生活をしています。

今回、私達の活動でも初めてとなる「障害児」への治療はその子が持つ全身的疾患の詳細や現在の体調、薬のアレルギーなど、本来日本であれば内科医との提携によりその内容は容易に把握できるものも、ここフィリピンのスラムでは学校医や学校看護師は一応の存在はありますがほとんど機能していません。

その為、医学博士でもある会長の林先生と今回初参加で林先生の旧知の友人でもあり、私や今西先生、この活動に参加をしている同門の先生達の恩師でもある元松本歯科大学 小児歯科学 教授 宮澤先生の参加はとても心強い存在でした。

このお二人を中心に適切なアドバイスを頂きながら、通常よりは少し時間はかかりますが、一人、また一人、と、決して治療を受けることのできない身体的に最も弱い子供達に光が差し込むかのように治療が始まりました。

ある子供が一人、診療室をかけずり回っています。  
通訳を使って説明しても理解することは難しく、友達の所に行ってはまた戻って来てまた座るを繰り返しています。

担当している先生に今西先生が「この子供はやはり治療は無理かな。」と尋ねます。「ちょっと無理かも知れないね」そんな二人の歯科医師のやりとりの中、会長の林先生がやってきます。すると先程までに落ち着き無く部屋中を走り回っていた子供が、何事も無かったかの様に林先生の前に座り、口を大きく開けるのです。これには二人の先生も苦笑いをしながらこれがボランティアを長年やり続けてきた者だけが伝えることができる「何か」を感じているようでした。

この学校では体育館のような室内のホールを診療会場として使うことができました。ほとんどが屋外での活動なのでこのようにある程度の空調が整っている環境での活動は大変有り難く感じます。

ここでは主に障害児の治療と、何故か 5 年生を対象として希望がありました。4000 人を越える生徒の内 5 年生だけでは不満が出るのではという問いに、校長先生は「心配ありません。他の学年には今日の事は秘密にしています。そして今日みんなには来年までよい子どもでいれば神様がまたチャンスを下さるとお話します。」

正直、校長先生はこの場所が今回どのような経緯で活動地区に決定されたかは知らないのでしょう。来年私達がこの学校に来る可能性は極めて低いのです。

それは一つの学校に集中してしまうとそれこそ不満が出てしまいます。私達のボランティアをずっと支えてくれるフィリピンのメンバーに尋ねると、「ハローアルソンのチームを待っている子供達、エリアは数え切れないほどあります。本当はフィリピン中の学校に来て欲しいくらいです。」

「神様のチャンス…」もう二度と会うことのできない子供たちが今長蛇の列を作り治療を待っています。今私達にできる精一杯の事…それはこのチャンスに全身全霊を傾け精一杯の優しさで尽くすこと以外ありません。

## 歯を守る・歯を治す・歯を抜く ということ…

歯は体にとって大切な臓器です。歯を失うということは「食べる」という行為が困難になるだけでなく、消化器系に負担をかけ、栄養吸収や子供達の成長発育にも大きく影響します。また、脳の活性化や記憶、学習能力の低下を招き、運動系、神経系の組織にも影響し、最終的にはその人の寿命、命にまで関わる大切な臓器です。

現在、歯科医療奉仕活動において、主に3つの治療ブースを設けています。

### ①保存ブース

歯を削り、レジンといわれる白い詰め物をして治すブースです。現地では「パスタ」とも呼ばれ、とても人気のあるブースです。今まで虫歯になればそのほとんどを痛みが限界になるまで耐へ、最終的には「歯医者まがいの」「病院らしき所」で安価で抜いてきた現地の人達にとって、黒い歯が白く治ると言うことは正に夢のような話でしょう。

ここでは日本から発電機、変圧器、削る道具、材料等を持ち込み、虫歯を治していきます。しかし、日本とはまるで違う環境での治療は、先生方もそれをアシストする側もとても大変であり、炎天下の環境ではそれだけでも尚更体力を奪って行きます。したたる汗、のぞき込む様な無理な体勢、それでも「1本の歯を助ける」その思いだけがこのブースの支えになるのです。

### ②抜歯ブース

治せるはずの歯を抜く。このことがどれだけ罪なことであり、また、この地でできる最善の治療でもあるか。

「痛みができればこめかみをさすり神様に祈る」

この言葉を現地の人達から聞いたとき私は耳を疑いました。1本の歯ブラシがお米1.5キロよりも高価なフィリピンでは、一日100円で生活をするスラムの住人達には到底買うことはできません。

そして慢性的な栄養不良の子供達に至っては、虫歯の菌が全身に及ぼし死亡する子供もいます。歯は大切な臓器です。人間が楽しく健康的に生きていくために必要不可欠な体の一部です。しかし、ここでは歯を磨くという習慣、歯ブラシを買うこと、虫歯を治療することといった日本では当たり前のことさえも不可能な現実があります。

歯を抜く。本来歯を守るべきはずの私達が下す「抜歯」という決断の重大さと、自分の体の大切な一部を失いながらも「サラマッポ(ありがとう)」と微笑む子供達の涙の笑顔を私達は一生忘れることはないでしょう。

### ③クリーニングブース

このブースの主役は歯科衛生士たちです。恐らく自分の歯の汚れを他人にとってもらうとい

うこと自体考えたことも無かった現地の人達にとって、このブースは最も人気のあるブースでしょう。今年は超音波スケーラーという日本の治療でも使用する機械も導入し、総勢 10 名の歯科衛生士が担当しました。日本から現地語に訳した自家製の歯ブラシ絵本などを用意し、歯ブラシさえ持ったことのない子供達に楽しく歯磨きのやり方を教えています。フィリピンの方達の歯石は日本人と比べて非常に硬いです。これは食べ物や水の性質にも影響しますが、長年放置された歯石は正に石のようで、歯科衛生士たちも玉のような汗をかきながら一生懸命治療をしています。歯石を取り終え、少し前歯がむずがゆいような感覚を楽しみながら爽快感と感謝の心で患者たちがお礼を言っています。

最先端と言われる快適で衛生的な日本の環境とはまるで違うこの地で、彼女たちが医療人として忘れかけた「何か」を学んだことでしょう。

A 班・B 班 それぞれ別の会場で行われた医療奉仕活動も終わりを告げようとしています。

野戦病院のような会場内に西日が差し込みはじめ、心地よい乾いた風が会場を包み込む時、今日も無事活動が終わったかという安堵感と、やり遂げた充実感の片隅に残る寂しさに似た何とも言えない感情になります。

団員がようやくタオルで汗を拭き始めました。名残を惜しむかのように皆、子供達と写真を撮っています。最後に A 班の学校では 1000 冊のノートと 700 本の鉛筆を学校に寄付しました。「皆さんの優しさに心から感謝します。皆さんと日本の友達に神様の祝福がありますように…」校長先生がお礼の言葉を述べます。

74 名が別れそれぞれが自分にできる精一杯の活動をやりました。帰りのバスの中、緊張と疲労で皆熟睡しています。ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア 2 日目が終了しました…。

## 2月9日 活動3日目 医療奉仕活動2日目

AM 5:00

やはり今日も目覚ましらず…年齢によって人は早く起きてしまう事を私も認めざるをえないでしょう。

カーテンを開けると今日は少し天気が悪いのでしょうか。マニラ湾の上空は少し雲がかかっています。今日は全団員が一つになり活動を共にする最初で最後の医療奉仕活動です。

ホテルのフロントには最後の医療活動に望む適度な緊張感を漂わせながら、74 名の団員が颯爽とバスに乗り込んでいくのが見えます。

今日も救急車が私達のバスを先導してくれます。今日は土曜日ともあって比較的車の往来は少なく感じます。その分、今日活動するスラムでは多くの住人が待ちわびていることと思います。AM 7:30 予定通りいざ出発です。

AM 8:15

ホテルから約 40 分。大きな通りをバスは右折をします。すると目の前に広がるのは「スクワッター」と呼ばれるスラムの現状です。「スクワッター」とは「不法占拠」という意味を持ち、最貧困層の人々が勝手に路上を占拠し住宅街をつくり「スラム」を形成している場所です。大きなバス 2 台がそのスラムエリアに入ると、物珍しそうに住人達が見つめます。子供達は嬉しそうにバスを追いかけ、何か言葉を投げかけながら手を振る子供もいます。しかし、突然現れた自分達とは違う人種の訪問に明らかに嫌悪感を示しながら静かに見つめる目も少なくはありません。この地区は現地の人間でさえも危険と感じる程、治安の悪い地域であり、と同時に、マニラ市内でも最貧困層に位置するエリアです。当然、ボランティアの様な支援、ましてや日本からの支援や医療活動等は全く無縁な地域ということになります。

バスが会場となる教会を併設した小学校に到着しました。バスからその会場まで60メートルほど歩きますが、全ての器材を団員が運び終わると、その入り口にある鉄のゲートがしっかりと閉められ、その周りをセキュリティーがしっかりと監視していました。これは会場の安全をまずは確保する重要な事ではありますが、その光景を目の当たりにすると、スラムという現実を感じずにはいられません。

## 医療奉仕活動

現地活動責任者 今西先生の指示の元、各ブースの準備が着々と進んでいきます。ゲートの外には既に数百人の患者が列を成しています。少し曇りがかった空も何とか持ちこたえてくれそうです。今回の治療ブースは室内ではありますが、あまり風通しも良くなく、狭い室内に 50 人を越える人間がひしめき合って治療を行う為、団員の体調が非常に心配です。準備が整いました。会長の林先生から一言。「皆さん、全身全霊でフィリピンの人達の為にがんばりましょう！！」さあ、いよいよ本年度最後の医療活動が始まります。

Holy Family Parochial School  
San Andres Bukid,Paco,Manila

10万人の600人

この地区は周囲に6つのバランガイ(集落)から構成されており、約10万人の人達が生活しています。

そのほとんどが市場での物売りやトライシクル(バイクタクシー)、ペリカン(自転車タクシー)を生業とし、一日の売り上げは約250ペソ(日本円で500円)です。一日を1~2食程度、毎日の

主食はご飯にお塩をかけただけの「塩ご飯」で、たまのご馳走は小さな魚が食べられるかどうかの生活をしています。

公立の小学校は無料ですが、最終的に卒業できるのは50%程です。もし、この地区で病気になったらどうするのでしょうか。

選択肢は3つです。

まず第1に市立病院に行きます。しかしここではまず治療費用を支払ってからの診察になります。当然、今日食べることもままならない彼らにとって、治療費用の捻出は大変厳しいものになります。

第2に、国立病院に行きます。ここでは診察は無料です。しかし、その後の薬は自分で全額購入しなければなりません。ということはどちらの選択をとったとしても治療を受けることなどできるはずもなく、最後の3目の選択肢、「我慢をする」ということを必然的に選ばざるをえません。

今、私達日本人は世界一の長寿国といわれていますがこの地区の人達の平均寿命は55～65歳ぐらいです。私達よりも10年も、20年も早く命の終焉を迎えるスラムの人達。

「運命」「宿命」という言葉だけでこの「命の不条理」を見過ごして良いのでしょうか。

現地のリーダーが話をします。

「今日、皆さんのお願いしたい患者はおおよそ600人です。恐らく今日一日でお願いできる人数の限界だと思います。しかしこのスラムでは10万人の人間がいますので全員治療を希望するでしょう。」私が「どのようにしてこの600人を決めたのですか。」と尋ねると、リーダーは「私達のチームが事前に全ての世帯を調査し、最も貧しい家庭を選び、尚かつ公平を期す為に各家庭一人のみの治療としています。」

一家で一人の治療。それは10万人のスラムの住人の内、最も貧しい家庭の中で最も困っている人を対象としているということになります。

一生で一度しかない今日という治療…これが貧困の現実でした。

気がつくと先程まで曇っていた空に少しずつ日差しが差し込み始めました。

10万人の中の600人。このスラムで生きる子供達にとって、医療、教育、そして将来…彼達の未来に明日を生きる「希望」という光が差し込むことは大変困難な状況と言わざるをえません。無邪気に笑いながら歯ブラシを片手にはしゃぐ子供達の瞳が私の心に悲しい現実を突きつけます。

ゲートの先に見える長蛇の列。事前に配られた600人分の整理券を持たない人達も一縷の望みを抱きながら並んでいます。私は雲の切れ間から見える青空を仰ぎます。「私達の活動は無意味なのだろうか…」無性のいらだちと虚無感を感じずにはられません。

その時、ふと、暑さの増す会場に目をやると、そこにはむせかえる室内でみんなが一生懸命活動をしているのが見えます。子供達が痛みで泣き叫ぶ声。それを必死に励まし勇気付ける高校生達の声。先生達が色々な指示を出す声。歯科衛生士たちが楽しく、元気に歯ブラシを教える声。様々な声がこの会場にこだましています。「私達の活動は決して無駄ではない・・」私達の活動がこの現状の全てを変える事など出来ません。しかし、この現実を知ることにより私達の「何か」が変わり、必ずこのバトンを繋げていく先には、世界中の人々が幸せになるための答えがあると信じています。

## 人生を懸けて..

時は無常にも刻一刻と活動の終わりを告げようとしています。現地活動責任者の今西先生が残り 30 分の指示を出します。もう一人、もう一人、と気持ちばかりが焦ります。

そこに患者誘導係から連絡が入ります。「整理券を持っていないけれど、朝 8 時からずっと並んでいる子達が 20 人ほどいます。どうしましょうか。」私が会長に確認すると、「診てあげましょう。私達が食事をする時間を少し削れば良いのだから。」「私達はボランティアに来たのです。精一杯の事をしてあげましょう。」

時間の延長は気持ちにも体にも負担をかけるのは事実です。安全という最も大切な問題を考えるに当たってはとても重要な判断になります。

しかし、検診ブースの私の目の前に座った女の子は未だ 12 歳です。その前歯は 4 本とも黒く穴が開いています。私はその時この活動の原点「アルソン君」を思い出しました。彼は当時 10 歳の若さで前歯 4 本を失いました。当時は私達にも歯を削って治すブースを設けるほどの力は無く、大切な歯を涙を流しながら抜いてきました。それが今、多くの方々のご協力と、沢山の仲間によって、このお女の子の人生を左右する治療を行えるのです。確かに虫歯は深く難しい位置にあります。

私は検診ブースから羽尾先生に声をかけました。「先生、この女の子を頼むよ。」「この歯を残すか、失うかでは彼女の人生が変わってしまうから。」彼もまた体力の限界に近いはずですが、しかし、持ち前の明るさと、この活動にかける「心」が彼の背中を押してくれたのでしょう。「分かりました。任せてください。」そして次々と残りの 20 人が診療室に入っていきます。

室内では最後の力を振り絞りながら全員で目の前の患者の為に自分ができる精一杯の事をやっています。

私の所に先程、羽尾先生にお願いした女の子が治療を終へやってきました。そして「サンキュー」と満面の笑みで微笑む彼女の口元は見違えるように白く治っていました。

治療が全て終わり会場中に拍手と歓声が鳴り響きます。現地の仲間や通訳、そして 74 名の団員全てに心から感謝します。片付けが終わり、この活動を支えてくれた「マニラ・ロータリークラブ」の皆さんへ高校生たちが感謝の気持ちと、ノートや鉛筆等を寄付しました。

## 別れ…

かけがえのない時間が今終わろうとしています。荷物を抱えバスにみんなが乗り込みます。すると先程まで晴れていた空からポツ、ポツと少しのわか雨が降り出しました。

充実感と寂しさが去来するこの瞬間を私は嫌いではありません。私は現地の仲間たちに「また来年」と一言だけ言います。感謝の言葉を尽くせばきりがありません。しかし、互いに「ボランティア」という「無償の奉仕の心」で繋がり会う関係は時として差ほど言葉はいらぬように思えます。数年来活動を支えてくれるマニラ代表の「リッキー氏」と笑顔で握手をして別れました。

バスの周りには沢山の子どもたちが群がっています。みんな、朝、私達がやってきた時とまるで雰囲気は違ってきます。そしていよいよこの地に別れを告げる瞬間、一人の水色のTシャツを着た男性がじっとこちらを見つめている事に気がつきました。

よく見ると今回の活動で義歯を製作した方の一人で、誰かを捜すかのようにバスの中を見つめています。すると、彼の義歯を作製した歯科技工士の田端さんが今西先生に呼ばれました。「ほら、田端、手を振ってあげな」それを聞いた田端さんが窓から彼に手を振ると、男性は嬉しそうに口の中を指さし、大きく手を振り返すのです。恐らく最後のお礼を言うためにずっと私達のバスを待っていたのでしょう。細い路地からバスが大きな排気音と共に、スラムを後にします。

窓を見ると沢山の人が手を振ってくれています。団員達も思い思いに別れを告げています。夕日が差し込む別れの時…スラムの人達が見送るその中にいつまでも手を振る水色のTシャツが見えていました…

## 2月10日 活動最終日

### 命がけで…

今日で全てが終わります。一年間温めてきた「2013年 ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア」が幕を閉じます。心地よい疲れと最後の物資支援活動に思いを込め、AM7:00 朝のミーティングの為にチェックアウトルームにみんなが集まります。

今日の一日の予定を事務局から連絡があった後、会長が皆さんに感謝の言葉を述べようとしたその時、万感胸に迫るとはこのような事を言うのでしょうか。会長の林先生が言葉の中で涙を流すのです。「みなさん…ありがとう…」会場が一瞬静まりかけたその時、奥様で今回も影ながら私達を支えてくれた真美さんが「みなさん、本当にありがとうございます。主人は病を患ってから毎年、これが最後、これが最後になるという思いで毎年命がけで参加をさせていただいております。今年も無事参加をできました事を心からお礼申し上げます。」

先生は5年前、脳幹内出血を患い奇跡的に回復をされ3年前より再びこの活動に参加をされました。この会を自ら立ち上げ、誰よりもこの会を愛し、支え、憂いでいらっしゃる先生が更に命がけで取り組んでいる姿勢に、私達、次のバトンを引き継ぐ者としてもう一度自分達を律し、更なる飛躍を心に秘めました。

今日も2台のバスが大きな音を立てながら、私達が乗り込むのを今か今かと待ちわびています。

空は抜けるような青さ、気温28度、今日も暑くなりそうです。「命がけで…」あの言葉が私の頭をよぎります。歯ブラシ1本に思いを込め、わずかな年金から募金をし、私達の活動をいつも支えてくださる日本の皆さんの思いに、私は「命がけで」活動をしているか。9年間続け見慣れたはずのスラムの光景が今朝は少し違って見えます。

最後の活動、私も「命がけで」頑張ろうと誓いました……

## バランガイ サマラ・マルケス

活動最終日は物資配布の活動です。この地区は毎年最終日に訪れ私達の会が継続して物資支援を行っているスラムの一つです。会場に着くとそこには既に数百人の人達が列をなし、私達のバスを見ると大きな歓声が沸き上がりました。

このスラムのリーダーは私と同じ年齢で、3年ほど前から親好があり、「今年も来てくれてありがとう。」と固い握手を交わしました。

高校生達が先頭に立ち、その周囲を大人達が見守りながら最後の物資配布を行います。ここでは500人分の物資を用意しました。

この地区は大人3000人、子供5000人ぐらいの人達が住んでいるといわれています。周囲を海で囲まれているため、主に漁師を生業としていますが、3年前から高速道路の拡張の為、湾の埋め立てが始まり、魚が捕れなくなってしまったそうです。その為一日の平均収入は200~300ペソ(日本円で400円~600円)程で、その他、半年契約の工場などの仕事は一日平均285ペソといわれています。また、この地区には「スカベンジャー」と呼ばれる「ゴミを拾って生計を立てている人」も住んでいます。毎朝ゴミ捨て場に行き、お金に換金できるものを拾い生活をしています。

スラムの住人達のほとんどは歯科治療など受けたこともなく、痛みが出れば限界まで我慢をし、最後は誰かに抜いてもらうだけだそうです。小学校には医療活動初日に訪れた「ビナカヤン小学校」が近くにあるため、無料で通えるものの、半数近くは最後まで卒業できず、通学をやめてしまいます。

私はリーダーに「今、ここで何が一番必要か。」という質問をしました。すると、彼は少し考えながら、「教育です。」と答えました。

生きるため、生き延びるために必要な知識、そして貧困から抜け出す為の術を知らない子供達に明日に繋がる「夢」を抱くことはできません。同世代の日本の子供達が様々な将来の夢を抱く中、この地区の子供達は「15歳まで生きること」を夢見ます。それは貧困のため3人に一人しか15歳まで生きることができないスラムでは、生きながらえることこそが現実の夢なのです。

会場を見渡せば高校生達が一人一人笑顔で物資を手渡しています。この500人はサマラ・マルケスという集落から300人、アプライヤという地区から200人、最も貧しい家庭が選ばれました。2キロのお米、歯ブラシ、タオル、石けんを手に皆本当に嬉しそうです。

そして、最後の住人に物資が手渡されたとき、最後のプレゼント、高校生からの歌のプレゼントが始まりました。

## We are the world

今年の高校生達は「We are the world」です。この曲は元々アフリカの飢餓撲滅チャリティーの為に作られた有名な曲ですが、高校生達が自ら選択し日本にいるときから互いに連絡を取り合い、各パートを決め、現地では高校生ミーティングが終了した後から、疲れた体で遅くまで練習をしていました。

この世界的に有名な曲が今、このフィリピンのスラムの地で日本の高校生達によって歌われます。全ての物が有り余る社会に生きる日本の若者たちの目にこの現実はどのように映ったのでしょうか。

何も無い、生きることに精一杯な壮絶な生活で見せる同世代の子供達の放つ力強い生命のエネルギーは、日本の若者達に何を訴えたのでしょうか。

大きな声で歌い終え、満場の拍手が鳴り響きました。  
互いをたたえ合い、涙を流す高校生達。

全ての活動が今、終わりました。会場では団員達が思い思い、最後の活動を惜しむかのように記念写真を撮っています。

今年も素晴らしい活動ができたことを本当に心から感謝をします。

空港に向かう為に皆バスに乗り込んでいきます。そのバスを取り囲むようスラムの子供達が手を振り、歓声を挙げています。

空は清々しいほどの雲一つ無い青空です。照りつける日差しに目を細めながら、私達の国、日本も、このフィリピンも、世界中全ての国、全ての人間、全ての命が、この同じ空で繋がっていると思えば、来年に向けてもう一度私達がやらなければ行けない「何か」を考え、「命がけで」取り組まなければならないと感じました。

74 名という運命の出会い。バスの中では皆、やり遂げた達成感と、どこか寂しそうな笑顔が印象的です。

マニラ市の街中に入るとやはり沢山の車で渋滞をしています。4 日前、活動初日の時は物資支援にいち早く行きたいと思う心を遮る渋滞に苛立ちました。しかし最終日の今日は何故かこの渋滞も余り苛立たず、むしろもう少しこの国で何かをしたい、もう少しだけこの場所を離れたくないような気持ちにさえなります。

むせかえるような暑さ。南国の独特とした臭い。そして乾ききった風と埃の混じったマニラの空気。そして今も尚私達の手を必要としているあのスラムの子供達の笑顔…

74 名の仲間と共に夢のような 4 日間が過ぎました。あの 4 日間を振り返るとまた一つ私は人生に忘れられない「心」を刻みました。しかし私はこれを単なる思い出にはしません。この 4 日間で得た全ては次に踏み出す一歩、未来へ繋ぐ糧として、来年もまたあのスラムで汗をかきたいと思います…。

## 感謝を込めて…

2013 年 2 月 7 日～10 日 4 日間 フィリピン共和国 マニラ市近郊スラム で行われたハローアルソン・フィリピン医療ボランティア は物資配付 約 1,000 人 患者治療数は過去最多となる 1,405 名 という結果になりました。大きな怪我や事故もなく今年も素晴らしい活動が出来たことは、私達の活動をいつもさせて下さる皆さんお一人お一人のお陰です。心から感謝申し上げます。

10 年前、初めて出会った患者、当時 10 歳の男の子「アルソン君」。

彼の前歯 4 本は重度の虫歯に侵されていました。現在、現地活動責任者を務めている群馬県吉井歯科診療所 院長 今西祐介先生はそのアルソン君の前歯 4 本を抜歯しました。

勿論日本では抜かずに治せる歯ですが、その時、その場ではこの選択しか方法がなく、先生は治してあげることができない悔しさ、悲しさで震える心を抑えながら人間にとって大切な歯を抜歯しました。

当時、現地通訳をいれてもわずか 20 名にも満たない人数で、物資となる歯ブラシやタオル等はごくわずかでした。そのわずかな有り難い物資を各自が大きなバックに詰め、漁船のような小さな船に乗り離島にある漁村へ向かったことや、ゴミ山に埋もれ、凄まじい悪臭の中で生きる子供達を目に涙したことを昨日の事の様に思い出します。

あれから 10 年。皆さんのお陰で、今年も多くの参加者に恵まれ現地スタッフを含め総勢 100 人近い仲間と活動をともにすることができました。また、年間数万本を越える歯ブラシのご協力や、新聞や雑誌、各地域での講演など幅広くこの活動をお伝えできる場を頂き心から感謝申し上げます。

各支部、各診療所では毎回治療の度に歯ブラシを握りしめ、重たいタオルや数十枚のタオルを持参し、フィリピンの子供達の為に持って来て下さる方々。

ノートや鉛筆を呼びかけ、クラスや学校単位で同じ世代、同じ子供達のために「先生どうぞ」と言って持ってきてくれる子供達。そして、大切な年金、大切なお金を「わずかですが」と言って募金をして下さる皆さん。

19 年前、会長 林 春二先生が「フィリピンの子供達へ笑顔を」とまいた「ボランティアの種」は、今、全国で少しずつその花を咲かそうとしています。その花は職種を越え、世代を越え、いつしか多くの人達の心の中に「優しさ」という花を芽吹かせました。

しかし、この「ボランティアの種」に「愛」という水を与え、「慈悲」という光を与え続けて下さったのは、まぎれもなく皆さんの「心」です。私達が活動できることも、スラムの子供達が微笑み、幸せになることも、全て皆さんのご協力のお陰です。

今、この国は病んでいます。この国を支え続けたお年寄りに対し優しさにつけ込みながら言葉巧みに騙し大切な老後の蓄えを貪ろうとする輩。我が子を殺め、尚かつその死をひた隠しながら公的手当をだまし取る輩。全てが満たされる社会に生きる日本人が物質的豊かさの裏に忘れかけたもの…

今、この地球は病んでいます。「富」「利益」という言葉の追求により、同じ星に住みながらいつしか私達は「格差社会」という言葉を生み出しました。

一日に 300 万人分の弁当が賞味期限という言葉一つで破棄される国もあれば、泥まみれのお米一粒を拾い集めて食べる子供もいます。蛇口一つひねるだけで衛生的で溢れんばかりの水を使える国もあれば、コップ一杯の水を飲むために 4 時間をかけて歩き続ける子供達もいます。

私は知りました。皆さんも知っていただいたはずです。世界の現実を知った時、答えは二つあります。それは「運命だから…」の次の言葉です。

「仕方がない。」を選ぶか「それならば手を差し伸べよう。」を選ぶかは私達次第なのです。

今年の高校生たちが唄った「We are the world」の素晴らしい歌詞の中にこんな一文があります。

これ以上知らないふりはできない 誰かが、どこかで変化を起こさなければ・(中略)  
見放されてしまったら、何の希望もない 負けたりしないと信ずることが大切なんだ  
変化はきっと起こると確信しよう 僕らが一つになって一緒に立ち上げるとき…

私達は自らが努力をして世界の 10%にあたる裕福層の日本に生まれることができたのではありません。ましてやフィリピンのスラムの子供達も自ら望みあの地で生まれたわけではありません。しかし、誰かが何かをしなければ「運命」という次の言葉の選択肢はたった一つしか無くなってしまいます。

私はその答えを皆さん、そして 74 名の仲間たちから教えていただきました。

私達の会ができる「何か」。私一人ができる「何か」はとても小さく、その力はほんの一滴でもありません。しかし、その滴が一つ、また一つと集まり、共に支え合うことができればいつか、「We are the world..」素晴らしい世界になると信じています。

今年も皆さんのお力のお陰で本当に素晴らしい活動ができました。心よりお礼申し上げます。これからも会一同、全身全霊で「ハローアルソン・フィリピン医療ボランティア」に取り組んで参りますので、どうか未永くご協力の程宜しくお願い申し上げます。

皆さんのご多幸、ご健康と、世界中で今も尚私達の手を必要とし、苦しむ子供達の幸せを心より祈り、「感謝を込めて..」本年度の活動報告とさせていただきます。

2013年度 ハローアルソン・フィリピン医療を支える会 団長 関口敬人